

現代青年の一人でいられる能力が友達とのつきあい方に与える影響

—質問紙調査および投影法検査を用いて—

13007PCM 谷口 穂菜美

問題と目的

Winnicott(1958)は幼児の観察を通して、「一人でいられる能力」を見出した。この能力の獲得に重要なものの一つとして“小さな子どものとき、母親と一緒にいて一人であった”という逆説的な体験が必要であると述べている。そしてこの体験が内在化することによって、一人でいても母親と一緒にいると思える安心感が備わっているために、その状況を楽しく過ごせるようになると考えられる。そしてその安心感を与えてくれる存在というのは、成長と共に母親から友人など様々な他者へと変わっていくと考えられている。このことから一人でいられる能力を持たない人は、安心感を求め一人になることを回避するために対人関係場面において何らかの対処行動をとるのではないだろうか。

一人でいることが不安である人の対人関係に関してはこれまでいくつかの研究がなされている。大嶽・吉田(2008)は一人でいることを避けることを「ひとりぼっち回避規範」とし、これが高いと対人関係場面で不安が生じやすくなり、孤立しないように友人に対して過剰に気を配るという特徴を示唆している。また仲間はずれを恐れる心理は、同調的で希薄化した友人関係につながることも報告されている(大平, 1995)。

青年期における友人関係は、親密で内面を開示するような関係、あるいは人格的な賛同や、同一視をもたらすような内的友人関係を特徴としている(岡田, 2007)。しかし近年、福重(2007)は現代青年の友人関係には、「友人との関係はあっさりしてお互いに深入りしない」といった表面的な関わりの一面と、「意見が合わなかったときには納得いくまで話し合いをする」といった積極的な関わりの一面があるとしている。このように希薄とされる友人関係は、一人でいることが不安である人の友人との付き合い方に

類似しており、友人関係の希薄化というのは一人でいる能力の発達未熟なために起こっていると考えられるのではないだろうか。

以上より本研究では、一人でいられる能力が低い人と、高い人の友達とのつきあい方において、どのような特徴が見られるのかを検証することを目的とする。

方法

調査協力者:A県内の大学生171名(男性46名, 女性125名)を分析対象とした。

調査期間・実施手続き:2014年10月から2014年11月までの間に、授業時間内の一部で質問紙を配布し集団で実施した。

質問紙の構成:フェイスシート、一人でいられる能力尺度(野村, 2000)、友達とのつきあい方尺度(落合・佐藤, 1996)、TAT 図版カード2で構成。

結果と考察

それぞれの尺度について主因子法、プロマックス回転を行った結果、一人でいられる能力尺度は「孤独不安心性」「つながりの感覚」「くつろぎ・孤独欲求」の3因子、友達とのつきあい方尺度は「防衛的」「自己自信」「全方位的」「積極的相互理解」「被愛願的」の5因子を抽出した。一人でいられる能力が友人関係にどのような影響を及ぼしているのかについて、各下位尺度ごとに強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、「孤独不安心性」は「全方位的」、「被愛願的」に正の影響、「自己自信」には負の影響が見られた。これは自分に自信を持つことができないために他者からの良い評価に頼り、一人にならないよう少しでも多くの人と仲良くしようとしているためと考えられる。「つながりの感覚」は「防衛的」に負の影響、「積極的相互理解」に正の影響が見られた。つながりの感覚が高い人は、一人でいたとしても心の中にいつも支え

となる存在がある(松尾・小川, 2000)と考えられており, この感覚を持つ人は他者と積極的に関わることに価値を見出しているとされている(鳥居他, 2011)。また相互理解しようとするからこそ, ありのままの自分を出すつきあい方をすると考えられる。「くつろぎ・孤独欲求」では「防衛的」にのみ弱い正の影響を示した。これは一人でいることを邪魔されないために, 他者とのかわりを避け, ありのままの姿をみられないようにしていると考えられる。

次に一人でいられる能力尺度の各下位尺度の平均値をもとに, 一人でいられる能力の高群($n=32$), 低群($n=31$)に分類した。これらを独立変数とし, 友達とのつきあい方尺度の各下位尺度において t 検定を行った(表1)。

表1 高群, 低群別の平均値と t 値

	高群	低群	t 値
	M	M	
防衛的	23.75	29.5	3.687 ***
自己自信	20.81	17.03	3.408 **
全方位的	17.66	18.8	0.774
積極的相互理解	21.31	18.23	2.896 **
被愛願的	9.69	11.47	2.762 **

*** $p<.001$, ** $p<.01$

その結果, 「防衛的」, 「被愛願的」において, 低群の方が有意に得点が高いと示された。いつでも他者を敏感に意識し, 傷つかないよう相手の様子を気にするため, 本音を避け表面的なつきあい方をするようになると考えられる。高群では「自己自信」, 「積極的相互理解」の得点が高いことが分かった。高群では内的な安心感が確立されており, 孤独を不安と捉えることも少ないためいざというときには誰かに助けてもらえるという感覚を基盤に, 積極的なコミュニケーションが可能となると考えられる。また一人でいることをくつろぎと捉えられるということは, 他者を気にせず自分の思いのままに行動が出来るため, 自分に自信を持つことが可能となるのではないだろうか。

一人でいられる能力の高群, 低群の TAT に関して, 物語の主人公の視点から「自立の程度」, 「結末」, 「家族イメージ」, 「テーマ」について分類を行い, χ^2 検定を行った。その結果, 「結末」において有意な差が見られ($\chi^2=6.636$, $p<.05$), 高群では幸せな結末を, 低群では不明

確な結末を作成することが多かった。このことから低群では対人関係場面における見通しの立てにくさがある可能性がある。一人でいられる能力が低い場合, 一人になることを恐れ, 今ここにいる人との繋がりを何とか持とうとするため, 現在の関わりは持つことができるが, その先その相手とどのようになっていくというところまで考えが及ばない可能性がある。その反面, 高群では現在が不安定な関係であったとしても, 肯定的な自信と積極的な関わりを通して, 幸せな結末を導き出すことができると推察される。

そしてさらに詳しく TAT の内容について分析するために, 鈴木(1997)に従い分類を行った。その結果, 低群では描かれている3人のそれぞれの在り方が詳しく述べられているものが最も多かった。このことは三人を緊密に関係づけないという点から, 人間関係の稀薄さが感じられる。また前景に描かれた女性の悩みに対して, 後景の人による無理解, いじめが述べられているものも多く, 受身的な人間関係も窺えた。高群では前景の女性が家業の大変さや家の貧しさを自ら察して悩むものが最も多く, 鈴木(1997)はこの反応を語り手自身の繊細な感性や優しさを表しているとしている。高群では相手と積極的に分かり合おうとすることから, 相手のことを考え, 思い悩むという物語が多く現れたのではないだろうか。また高群においては前景の女性が中心的扱いを受けているが, その女性に悩みや苦しみを見ていないという物語もやや多くあった。鈴木(1997)は後景から彼女への作用が認められる反応は, 被検者自身の物事への関与の姿勢を反映しているとしており, 高群においては物事への関与の姿勢が弱いと考えられる。村木他(2012)は一人でいられる能力を持っている人の中には他者と親しくなることよりも独立していることを重視するタイプがいるとしており, 主人公に悩みや苦しみを見ていないものを描いた人はこのタイプに属すると考えられる。つまり高群は, 他者との交流を持ちながらも一人を楽しむことができるタイプと, 他者への関心が低いために一人でいられるタイプの二者に分けることができると考えられる。